

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

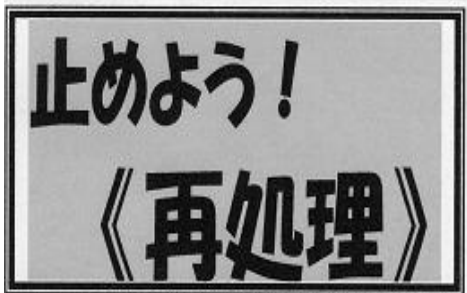
郵便振替 02240-5-102650

《再処理 / 岩手の環境》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k\_imag



《天恵の海》

2010(平成22)年

3月 31日

第83号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636



(六ヶ所村尾駁)

# 六ヶ所村農業世帯の日常食から ヨウ素129 平常値の約30倍検出

(財)環境科学技術研究所

(財)環境科学技術研究所調査報告

『岩手の会』では、再処理工場の放射能環境放出について資料を収集し調査を続けています。六ヶ所村にある(財)環境科学技術研究所の青森県委託調査『年次報告書』に、「食物汚染」について重大な数値が示されています。

陰膳法による試料採取

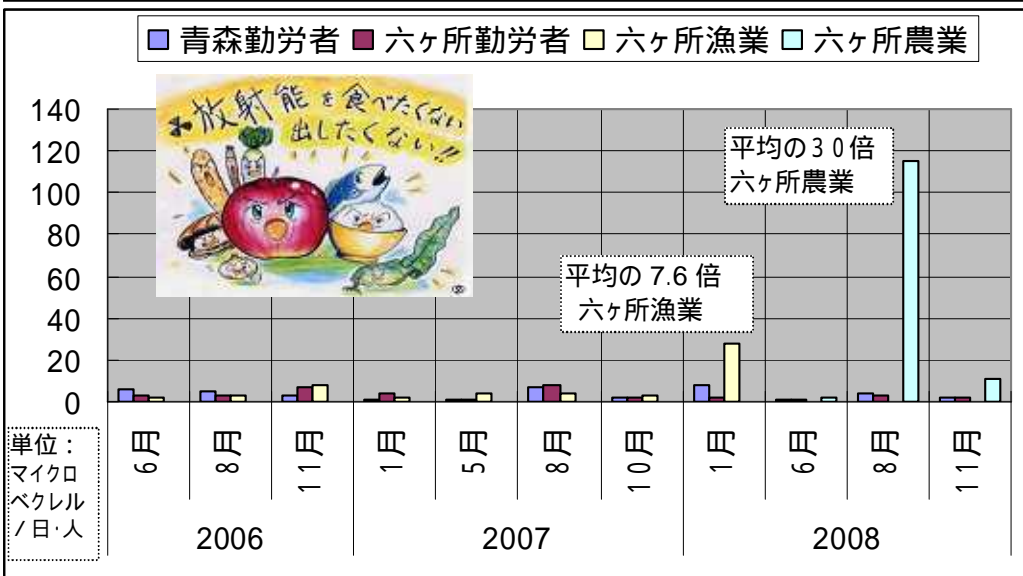
(財)環境科学技術研究所では、六ヶ所村の住民の食事の放射能検査を実施していました。「陰膳法」といわれる食事調査の方法は次のようなものです。

報告書では、「従事職業業態」として「青森市勤務」「六ヶ所村勤務」「六ヶ所村漁業」「六ヶ所村農業」の四つの「世帯」グループを記載している。

グループごと五人に委託し、指定した一日の全ての飲食物と同じ食品(「陰膳」)を試料として回収した。

五人分を一つの試料としてミキサーで粉砕、混合し均質化し、「うち二キ」を凍結乾燥させ、ヨウ素129、炭素14、有機結合型トリチウム(OT)の分析を行った。

再処理工場による影響 日常食試料によるヨウ素129摂取量



『六ヶ所漁業・農業世帯』の数値が急上昇。「ヨウ素129」の測定結果は下表のようになりま。これを基にグラフ化したものが左図です。二〇〇八年から六ヶ所村の漁業世帯と農業世帯で急上昇しています。すなわち二〇〇六年六月から二〇〇七年十月までの数値を平均化すると『マクロクロケル/日人』となる。これを「バックグラウンド(汚染前の自然値)」とみ

なし、その後の変化を比較すると、二〇〇八年の『六ヶ所漁業世帯』は『マクロクロケル/日人』でそれまでの七六

年月	2006年			2007年				2008年			
	6月	8月	11月	1月	5月	8月	10月	1月	6月	8月	11月
青森市勤務者	6	5	3.3	1.1	1.2	7	2	7.5	*1.1	4	*1.5
六ヶ所勤務者	3	3	7	4	1.1	8	1.6	2.1	*1	2.6	1.6
六ヶ所漁業	2	3	8	2	4	4	3.3	28			
六ヶ所農業									2	115	11.4

2006.6-2007.10についてはP523図から読み取った値 (\*はこの値以下という表示あり)  
(財)環境技術研究所・平成20年度『放出放射能環境分布調査報告書』P509~P532から作成

倍になっています。報告ではどういっわけか、その後、「六ヶ所村漁業世帯」の項目は消え、「六ヶ所村農業世帯」となります。その「二〇〇八年八月」が「1.5マイクログラム／日人」でじつに、「自然値の二〇倍」です。

この数値について同報告書は、大型再処理施設から放出されたヨウ素129の影響を受けた可能性があると述べています。

なぜ漁業世帯の数値が発表されないのか？

「アクティブ試験が始まって三年目で六ヶ所村の漁業世帯や農業世帯の食べ物のなかの放射能の数値が増大した」という重大な事実が、同研究所の分析で判明しました。この結果について、さらに詳しい報告を行う義務が調査を委託した青森県にはありません。住民の知る権利に配慮、事業者や行政担当者、マスコミの責任ある対処が望まれます。

(注) (財)環境技術研の平成20年度放出放射能環境分布調査報告書は青森県立図書館と青森市立図書館にあります。各地の公立図書館から資料請求出来ます。

# 原子力に頼らないエネルギーを考える

## 六ヶ所市民サミット世話人会学習会

再処理反対を訴える市民が結集している「六ヶ所村ラウンド」東日本市民サミット」の世話人会が主催してグリーンエネルギーについて学習会が三月一三日(土)八戸市内で開催されました。

昨年二月に盛岡で約一七〇人を結集し「ストゥップ再処理」の創意ある運動が切り拓かれましたが、世話人会では、第二回大会を展望するために「原子力に替わるエネルギー」について、私達自身が十分に実態を理解し主体的に判断できるだけの学習が必要である」との



環境エネルギー政策研究所 竹村英明さん

意見が出され企画されました。

会場には青森、岩手、宮城、秋田などから約三〇人が出席し地元「ストゥンド」の山内雅一さんの挨拶の後、各世話人が分担し研究した代替エネ

ルギー十一種について「三分間レポート」がなされました。

続いて環境エネルギー政策研究所の竹村英明さんにより、自然エネルギーの世界の現状と日本の実情について一時間余にわたる詳細な講演がありました。

竹村さんは日本の自然エネルギー政策は二〇〇〇年初頭における電力会社の供給義務づけ制度が、あまりに低い目標値で設定され、その政策的な欠陥により、世界に

先んじていた日本の太陽光発電は、スペイン、ドイツ、米国などに追い越されてしまった。だから日本はこの失われた十年の政策的な不備を早急に克服し、可能性が大きい広がついている自然エネルギー産業に世界に伍して

参加すべきであると強調しました。自然エネルギーの技術的な可能性について、日本は風力発電や太陽光発電では素晴らしい立地条件を備えているとし、原子力や化石燃料にこだわらぬ国政の誤りや大

企業の産業支配を克服すべきとしました。そして長野県飯田市の「おひさまモデル」の実例などを紹介し「無数の市民の夢のある投資」が成果を挙げているとしました。

「二十世紀は自動車」の世紀、二十一世紀は「自然エネルギー」の世紀だから原子力は無駄で危険なエネルギーとして消えていくしかないのです」といつ結論に、何となく明るい未来を感じた学習会でした。(尚)



### 水めがね

### 六ヶ所村尾駮沼河口にて

八戸で自然エネルギーの学習会があった翌日、六ヶ所村まで行ってみた。この日は大潮に近く朝九時が干潮。尾駮河口に立つて青空に朝日が昇る海岸を眺めた。内陸からの西風がかなり強く水面に波紋を作り、河口に設置された環境科学技術研究所の流速計の標識の赤旗がはためいている。水面が下がり、流速計設置台の杭の足下まで見える。砂浜が白く広がり、陽の光、白い雲、風の音、海のおいか素晴らしい。それからすこし

時間をつぶし、午後二時半、尾駮沼河口に再び立った。満潮である。当然ながら、砂浜がだいぶ水没し、杭も幾分沈んでいる。その高低差は正確には分からない。この半日で海水がどれほど流入したのだろうか。東側の六ヶ所沖合の海を見渡した。今日は風下になっていて、防潮堤の三ヶ所先に再処理工場からの放射性廃液の放出口がある。アクティブ試験が始まって以降、ウラン換算で約四二五トンの使用済み核燃料が処理され廃液が

六〇〇立方メートルのタンクから二四〇回余も流されている。その放射能はトリウムだけでも約二一八一兆ベクレルに達し、一般人の約三九〇〇万人分の年摂取限度に匹敵する。下北では春から夏に海からの冷たい「なれ風(やませ)」が吹く。秋から冬は台風や低気圧が通る。海水は強風に吹き上げられ、放射性物質を帯びた粒子は陸地に向かって再上陸する。英仏の再処理工場周辺では「小児白血病」が増えているという。激しい風に吹かれてそんなことを考えた。(尚)

### 2010.3.14 尾駮沼河口 (尾駮港付近)

2008年6月、この海底堆積物からヨウ素129が165ナノベクレル/g・dry 検出。(2年前の約12倍)



9:00 干潮



14:30 満潮

### 潮見表 (八戸港)

2010/3/14(日)	
大潮(28)	
日出	05:48
日入	17:40
月正中	10:24
03:15	109cm
03:53	49cm
14:35	119cm
21:05	21cm